

教育の「再興」を

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
本多 環氏

福島大学 うつくしまふくしま未来支援センター
 特任教授



東 日本大震災から四年半以上がたち、福島の子
 どもたちの学力や体力・運動能力の低下、い
 じめや不登校の増加についての報道が目につく。

震災発生後、学校環境だけでなく地域や家庭環境
 の大きな変化を強いられたことにより、自己肯定感
 を低下させ、自分自身を見失った子どもたちが数多
 くいた。そのため、福島の子どもたちに対してスク
 ールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの増
 員等、「心のケア」を目的としたさまざまな支援が行
 われた。教育・医療・福祉の連携を図りながら子ども
 たちの「心のケア」を充実させたことにより、心に
 傷を負った多くの子どもたちが救われた。

ところが、新たな課題が表面化している。文部科
 学省は変化の激しいこれからの社会を生きる子ども
 たちに対し、「生きる力(確かな学力、豊かな人間性、
 健やかな体)」を育む教育を推進しているが、大震災
 を機とした大きな環境の変化により、福島の子ども
 たちの「生きる力」が低下している。環境の変化は少
 ならずどの地域にも起こり得る。福島が抱えた課
 題を今後ほかの地域が抱え込むこともあるかもしれ
 ない。福島で起きた状況を「経験知」として活用す
 ることができるよう、「生きる力」の低下の原因や「生
 きる力」の向上の方法を明らかにしておくことが大切
 である。

福島では国内外からの多大な支援により、震災前
 には経験することのできなかつた機会に恵まれ、新
 たな夢や希望に向かって歩み出している子どもたち
 がいる。一方、変化に対応することができず、深刻
 化した課題を持ち続けている子どもたちもいる。「子
 どもの現状」という枠組みが縦にも横にも膨れ上が

り、今までになく多様化し
 ている。「福島の子ども」と
 いう言葉では語り切れない

状況が起きており、既存の対応策だけでは支援効果
 が上がらない。今一度、子ども一人ひとりの状況に
 寄り添い、子どもがどのような課題を抱え、その課
 題を解決するためにはどのような支援が必要である
 のかを、丁寧に見つめ直していくことが大切だ。

そのためには、子どもの教育を学校だけに任せる
 のではなく、地域が子どもを育てるという意識を高
 め、地域の教育力向上を図ることが重要である。子
 どもの状況が多様化すればするほど、支援を行う大
 人もさまざまな方法で子どもたちにかかわることが
 求められる。人とのかわりの中で、成功や失敗体
 験を重ねながら学び続ける子どもたちにとって、地
 域には数え切れない学びの場がある。そのような学
 びの場を提供することは地域の活性化にもつながる
 のではないだろうか。

復旧・復興が叫ばれ続けているが、子ども支援の
 視点においては、子どもたちの低下した「生きる力」
 を再び高めるための「再興」を目指したい。地域にあ
 る「ひと・こと・もの」を積極的に活用しながら、目
 の前にいる子どもの現状に寄り添った「再興」を望む。



※このコーナーは、福島の被災者と被災地域の復旧・復興を科学的・学術的見地にに基づき支援している福島大学「うつくしまふくしま未来支援センター(FURE)」のスタッフによる寄稿です。科学的データを基にした福島県の産業や環境の現状、FUREの取り組み、直面している課題などを、約20回にわたり連載し、より正確な福島県情報をお届けします。